慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	南朝の研究(中村直勝著, 星野書店發行)
Sub Title	
Author	今宮, 新(Imamiya, Shin)
Publisher	三田史学会
Publication year	1927
Jtitle	史学 Vol.6, No.4 (1927. 12) ,p.154(628)- 156(630)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19271200-0154

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

南朝の研究（中村直勝著　星野書店發行）

本書は前後一貫した南朝史の研究ではなく、曾て著者が雜誌新聞に發表した論文を載錄したものである。然し、舊論文を其のまま再刊されたのではなく、悉く、多少の訂正を加へられ、中には面目を一新したものもある。

本書の內容は「後醍醐天皇」「長慶天皇の御卽位」「南朝の後」「後醍醐天皇の一綸旨」「南朝の經濟政策管見」「安樂壽院の研究」「南朝と金剛寺」「新葉和歌集奧書に就て」「楠木正成」「楠木正儀」「吉田定房」「後村上長慶の兩帝と大阪」の十二篇と、附錄として「南北兩朝と醍醐寺」「南北兩朝の對立と大覺寺」「南北朝時代の京都の災害」「南北朝時代ある農村の生活」「南北朝時代の出版事業」「足利尊氏の理想」「人としての足利尊氏」の七篇を添へてある。

全篇を通して、著者は多くの史料と、流麗なる筆とを以て、人物を縱橫に批判し、事件を詳細に解剖し、論斷を下してゐる。先づ後醍醐天皇に就ては、天皇の御理想は武家政治、院政、攝關政治を廢し、天皇の親政、所謂公家一統の政治にあつたとして、天皇の御學問は、漢唐の古學を排して、程朱の說を採用せられ、非常に御英明で、持明院統の花山天皇も深く敬慕させられた事を、花山院宸記より證明せられてゐる。

南朝の經濟策管見に於ては、後醍醐天皇の財政策は、政見と共にあまりに理想に奔りすぎ、實際には行はれ得なかつた。この政策を强ひて行つた爲に、弊害百出し、御祖先以來の廣大な所領は散亂してしまつた。天皇の經濟策の行きつまつた結果「南朝分」なる新經濟維持法が出現した。然しこれは南山を養ふには餘りに少いものであつた。南風がどうしても競はなかつたのは、かゝる點にあると述べられてゐる。尙安樂壽院の研究、南北朝時代ある農村の生活、ともに當時の經濟生活を研究する上に、益する所甚だ多い文獻である。

楠木正成に就ては、建武中興の論功行賞は不公平であるとの評があるが、新田、名和兩氏は、京都の外護線となり、楠木、北畠兩氏は京都の內護線を守護したものであつて、天皇の正成に對する御信任の深き事を示すものであるとし、又、正成の筆蹟と、護良親王、北畠顯家、後醍醐天皇の筆蹟と酷似するのは、正成が天皇と學問の系統を等しくするもので、それに依つて笠置山以前から、已に天皇の討幕の御計畫に策應して居つたものであらう、正成は、程朱の學に依り、忠義の何たるやを解したもので、彼が天皇の輦下に勤仕したのは、全く忠義の思想からであり、又彼は「忠」の觀念の爲に自ら進んで死すべき時に欣んで死んだのであると言つてゐる。

楠木正儀については、多數の文書によつて、其の不明であつた傳記を記し、正儀は、元德二年に生れ、正行、正時の弟で、正行

の死後南朝の中心として、活躍し、左馬頭左衛門督となり、さらに參議に進み、元中五六年頃六十歳前後に薨じたとなし、その北朝降伏の理由については、主戰派との意見の齟齬、正平末年に於ける、南北兩朝合體の破裂、後村上天皇の崩御、及び皇統繼承の内訌等に依るものとし、巧に從來の諸說を折衷し、新見解を出してゐる。尙ほ彼の性格については、太平記に言ふ樣に「父にも不似、兄にも心替て、少延たる者」ではなく、彼は思慮の深い、四周の情勢を洞察し得る良將であり、一個の見識を有する、極めて溫情のあつた人であることを古文書、花押、書風等より論斷し、疑問の人正儀を鮮明にしてゐる。

吉田定房については、先づ家房の生涯を略述し、後醍醐天皇より殊遇を受けた定房が、天皇の討幕の御計畫を幕府に密告し、且つ天皇の南山御潛幸にも供奉しなかつた心理を描寫して、「眞の天才でない人が、自分の力量以上の地位を得た、身分不相應な出世をした、而して其の地位を維持するだけの力量材能がないことを自覺した時には、確に言ひ知れぬ淋しさを感ずる。この淋しさと不安さとは彼を驅りて密告者たらしめ、叛逆者たらしめた」となしてゐる。

南北朝時代の出版事業については、先づ五山版や正平版論語の刊行について考察し、次で武人開版の事情を述べ、殊に尊氏の開版事業を詳細に說いてゐる。而して南北朝時代が、出版事業の上に留意さるべき理由として、八箇條の考察を提出し、最後に開版事業の困難であつた有樣を記してゐる。

足利尊氏の人物については、彼は後醍醐天皇を苦しめ奉つたのに、天皇の御菩提を弔ひ、千僧供養をしたり、天龍寺を建立し、自ら砂持ちをやる樣な矛盾した行爲は、彼に一つの理想があつたからである。彼は本來賴朝の武家政治を理想とし、平氏たる北條氏の後には、源氏の頭棟たる自分が代るべきものだと信じ、天皇の恩遇には感謝しながらも、天皇の理想とせらるゝ公家一統の政治には反對しなければならなかつたのである、即ち彼の反對したのは公家一統の政治で、後醍醐天皇に對してではなかつた、玆に於て彼は內心省て大なる煩悶を抱き、其の心持が天龍寺の創建となり、一切經の書寫となつたのであるとなしてゐる。

以上は極めて大體の內容である。氏が序文に「歷史は科學であると同時に藝術であらねばならぬ」と述べられてゐるのは、無味乾燥な文書の羅列を排し、藝術的に表現することを意味するとすれば、本書は實にその目的を遂げたものである。のびゝした、然も華麗な筆致を以て巧に文書を取扱ひ、限りなく讀者の興味をそゝり少しの退屈をも感ぜしめないあたりは、古文書及び中世史に造詣深い氏ならではと思はるゝ點が多い。特に人物を評論し、その心理を推理し、描寫するの妙は氏の得意の壇場であつて他の追從を許さないものであらう。かくて本書は普通の歷史ものとは全く趣を異にしてゐるのである。

尙本書は文書、記錄、花押等五十數個の圖版が挿入してあるが、その多くは著者自ら撮影複寫したものであるから、稀覯のものが多い。又裝幀は天沼博士の意匠で、背革及び扉題には南朝に因緣深い觀心寺本堂の建築をかたどり、表紙に用ひたものは大覺寺を象つた嵯峨菊である等、非常にこつた美しい本である。とにかく

近頃の好著述として江湖讀書子に推薦する。（今宮新）

東洋史說苑（桑原隲藏著　弘文堂書店發行）

本書は、博士の多年の東洋史研鑽の努力の結果たる論文中より比較的、一般的問題に關するもの二十三篇を撰んで紹介されたるものであつて、その全篇の內容は、時事、文化、宗教、風習、氣質、人物、雜纂の七部門に分類されてゐる。その卷頭の辯言にことわられてゐる如く、二三の論文を除いては、凡て何かの機會に公表されたものであるらしい。兎に角、全篇を通じて見るに、何れの論說も、著者が多年の蘊蓄を傾けてなれるもので、輕々に讀破し難きものであるけれども、該博なる知識と、理解力とを以つて、支那の古今にわたつて、その時事を論じ、文化を論じ、宗教を論じ、國民性を論じ、人物を論じ來たり、論じ去る所、日頃拮屈難解なる東洋史に倦みたる吾人も、こゝに於ては、幾分氣樂に、東洋史の眞味と興味とを、享有することを覺えるのみでなく、自づと多くの理解力を助けられる氣分がする。吾が國に於ても、東洋史を專攻する學者の中には、その學殖に於ても、識見に於ても歐米の學者に優るとも、遜色のない人達も、少くないといふことであるけれども、何れも專門的分析的研究に沒頭される爲めに、專門以外の一般的方面には、餘り顧みられる學者が少いのは、初學者の甚だ遺憾とする所である。著者は、この點に留意されて、東洋史專攻學者と社會一般との接觸を計る爲めに、本書に於て、支那研究者の任務、若しくは、對支文化事業に就いてと題する論文を掲げ、特に、この鉄環に對する專門學者の注意を促すと共に、後輩の者をして、激勵されてゐるのは、大いに味ふべきである。とは言へ、東洋史は、その範圍も廣大にして、その開拓も新しいから、先人未踏の地が多く、從つて、史料の考證と、批判とは容易でないだけに、多大の忍耐と、努力を要するはいふまでもなくその苦辛たるや、實に敬服すべきである。けれども、今や、追々とこの桔屈難解なる支那學も、科學的研究方法と相伴つて、多くの史料や、事實が實證されるに至つたので、他日東洋史も、次第に一般化すには容易になるであらうと信ずる。余は本書は、今日の一般の要求を、多少なりとも、充たすであらうと信ずる。若しも、讀者が、この全篇のよく實證され、且つ說明されたる問題を綜合し得るならば、可なり東洋史に對する理解力を、高めるであらうと思ふ。（山本光郎）

牟婁口碑集（雜賀貞次郎編　鄉土研究社發行）

紀州の熊野地方は古くから牟婁とも稱せられて、現在では東西兩牟婁郡は和歌山縣內に、南北兩牟婁郡は三重縣內に編入されてゐる。わが國の歷史において古代には神武天皇の大和入りの上陸地として、中世には熊野三山の信仰や熊野海軍などによつて、この地方が重大なる役目を演じたにかゝはらず、現在では最近漸く風景の美をもつて天下に知られつゝあるやうになつたものゝ其他の點においては、交通不便のためか、なほ一般に知られてゐない。『牟婁口碑集』は、この地方、殊に田邊を中心とした西牟婁郡に